TAMABI NEWS

Tama Art University News Magazine

vol.87

「現代日本画の系譜―タマビDNA」展
から見る多様性の淵源

日本画の伝統を超えて自由な発想が生まれる理由

「現代日本画の系譜－タマビDNA」展から見る多様性の淵源

日本画の伝統を超えて自由な発想が生まれる理由

2021年4月3日から6月20日の間、多摩美術大学美術館と八王子キャンパス内にあるアートテークギャラリー（※5月7日まで）の2会場で「現代日本画の系譜―タマビDNA」展を開催しました。現代日本画をけん引した加山又造と横山操を本学日本画教育の中興の祖と位置付け、二人の薫陶を受けた教え子たちがその理念をどのように次世代に伝え、受け継いでいるかについて、89人の作家たちの作品を通して展観したものです。本学主催の展覧会として実行委員会形式で企画され、日本美術史を専門とする木下京子教授（共通教育）が実行委員長を務めました。本学の知見を結集した同展を軸に、加山、横山がもたらした『タマビDNA』の淵源をたどりつつ、現在の日本画専攻とその先を展望します。

「現代日本画の系譜ータマビDNA」展 実行委員会（多摩美術大学、多摩美術大学美術館、多摩美術大学日本画研究室、横山操学内共同研究会）
共催：公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
協力：多摩美術大学アートアーカイヴセンター

本展覧会は「東京2020 NIPPONフェスティバル」の共催プログラムとして実施されました。

TOKYO 2020
NIPPON FESTIVAL

加山又造と横山操
二人の情熱が日本画の潮流を変えた

1966年頃の加山又造（写真左）と横山操

「現代日本画の系譜―タマビDNA」展では加山又造と横山操を現代日本画の旗手として捉え、本学日本画教育の中興の祖と位置付けました。この二人を起点に日本画の『タマビDNA』が生まれ、そこからさらにさまざまな表現に発展し、今もなお多種多様な作品を制作する作家が生まれ続けています。二人の足跡を追い、日本画専攻の最大の特徴といえる多様性の原点を振り返ります。

因習にとらわれない二人の姿勢が新たな教育を生んだ

「自由」と「在野精神」の多摩美へ

多摩美術大学の日本画教育は、前身である1929年創立の帝国美術学校において、「西洋画科」、「工芸図案科」と並ぶ3本柱の一つ、「日本画科」としてその歴史が始まりました。学内分裂を経て1935年に上野毛に開設された多摩帝国美術学校では、日本画家の安田靫彦（1884-1978）が特別顧問に迎えられ、官立の東京美術学校（現在の東京藝術大学）とは一線を画した多摩帝国美術学校の独自の個性を確立すべく、その影響力を発揮しました。

その後、激動の戦中戦後の変遷を経て、1953年に4年制大学に昇格し、現在に至ります。

加山又造が本学日本画専攻に着任したのは1963年のこと。当時、理事長を務めていた村田晴彦（1903-1975）の招聘によるものです。「自由」と「在野精神」を掲げ、各科の教授陣の強化と一新を図った村田理事長が加山を招聘したのは「近代日本画にはらむ伝統や因習、価値観からの脱皮を目指す思惑があったのではないか」と、DNA展実行委員長の木下京子教授は図録に掲載された論考の中で述べています。

横山操は村田理事長の命を受けた盟友・加山の勧誘により1965年に着任。以降二人は1973年4月1日に横山が他界するまでの7年6ヵ月の間、共に手を携え、多摩美の日本画教育に真摯に取り組みました。

日本画の概念を覆す画家として頭角を現す

加山又造は1927年、京都・西陣織の衣装図案職人の家に生まれました。京都市立美術工芸学校絵画科（現在の京都市立芸術大学）を修了後、東京美術学

加山又造 Kayama Matazo

京都府生まれの日本画家。祖父は四条・円山派の絵師、父は京都・西陣織の衣装図案職人で、幼少期から絵を描くことに親しんだ。日本画家・山本丘人に師事。師の山本ら13人の画家たちによって結成された創造美術（1948年発足、後の創画会）にて、戦後日本画の革新を担う1人として活躍する。

加山又造《雪月花》（1967）
168×355.7cm　イセ文化財団所蔵

Yokoyama Misao 横山操

新潟県燕市出身。戦後の日本画壇の風雲児と称された日本画家。戦時中には召集されて捕虜生活を経験し30歳で帰国。以後大胆かつ豪放な大作を次々と発表。晩年は病に苦しみながらも筆をとり、叙情あふれる色彩豊かな作品や水墨画など意欲に満ちた作品を描き続け、後に続く作家たちに大きな影響を与えた。

横山操《闇迫る》（1958）
181×455cm　福島県立美術館所蔵
© Masao Sugita 2021 /JAA2100025

校に進学。学徒勤労令で学業を一時中断するも、終戦後に復学し、1950年に春季創造美術展で初入選を果たした後は、日本画家として正道ともいえる道を歩み始めます。一方、1920年に新潟で生まれ育った横山操は、子どもの頃から絵が上手く、14歳で画家を志し上京。銀座でデザイン会社を経営する画家の内弟子となり、版下やポスター描きなどを手伝いながら絵画制作に励みました。その後、日本画に転向し、1939年に画学校に入学するも、その翌年の1940年12月に召集。中国戦線で兵隊生活を送り、終戦後も1950年に復員するまでソ連の捕虜収容所での過酷な石炭採掘に従事させられました。

このように生まれも育ちも対照的であった加山と横山は、1950年代後半に入ると、それまでの日本画の概念を覆す画家として頭角を現し始めます。この頃の加山の作風は、ラスコー壁画やルソーなどの影響を受け、大胆なモチーフによる革新的な作品を次々に発表。横山も、赤黒いマグマが噴き出し山の裾野にまで広がる様子を描いた幅4メートル超の大作《炎炎桜島》など次々と代表作を発表し、脚光を浴びました。

自分の意思で、自由に創造する学生を育てる

加山と横山が初めて出会ったのは、1957年に東京で開催された加山の個展会場でした。それから間もなく一緒に食事をする機会があり、意気投合したとのこと。それが縁となり、1965年からはそろって本学の日本画教育に携わります。共に40代前後という年齢で、人間的にも作家的にも充実していた時期でした。加山は教員としての横山について「考えようによれば、あの人ほど優れた美術大学教授は一人もいないといっても過言ではないと思う。（中略）横山さんにとって、大学教授としての生活は、彼の暗い、閉ざされた青春を取り戻す、実に楽しい場であったようだ。（中略）もちろん私も、これからの日本文化に、この若者たちの力で少しでも何か新しい意義を付け加えたいと、必死な想いであった」と述懐しています。［加山「追悼・横山操 賢兄、横山操逝く」P.63より引用］

二人がどのような学生の育成を目指していたか、当時の日本画専攻の入試要項にはこう記されています。「1学年では、植物写生等の細密画描写により、対象物を正しく把握し、基本的技術と描写力の養成に徹する。2学年では、対象物の実体を多面的に把握しながら想像力を養うことを目的とし、3、4学年では主体性と自発性に基づく創造活動を掲げ、卒業制作に至るまで一貫して『自由』な制作を試みさせる・・・」

「各自の主体性、自発性」「作家としての創造活動」「自由な制作」。この3つの理念こそが、加山と横山が目指した多摩美の日本画教育の姿であり、『タマビDNA』の『核』であるといえます。

力強い言葉で書かれたこの文章は20年以上も入試要項に掲載され、本学日本画専攻の教育方針で在り続けました。生まれも育ちも対照的な加山と横山でしたが、苦境にあっても絵を描き続ける精神力と実行力は共通しており、その情熱は戦後の日本画の潮流を変え、多摩美の日本画教育の在り方も変えていきました。お互いに深い信頼関係を築いていた二人が手を携えて教鞭を執ったことにより、因習や伝統を超えて自由な発想による日本画教育が生まれたのです。二人がもたらした『タマビDNA』を受け継いだ教え子たちは今、日々そのDNAを発展させています。

多様な価値観が作家としての感性を目覚めさせる

日本画の伝統を超えて自由に描くという加山・横山の創造精神は現在の日本画専攻にも受け継がれ、学生たちは既存の枠にとらわれることなく多様な価値観をもって日々制作に向き合っています。二人が貫いた教育理念はどのように次世代へと継承され、今に息づいているのでしょうか。日本画専攻の教授陣にお話を伺い、その軌跡をたどりつつ、本学日本画教育の現在地点とその先を展望します。

学生を一人の表現者として認め、対等の大人として扱う

自由な校風の下で育まれた創造の精神

加山又造、横山操に続き、多摩美の専任講師として着任した上野泰郎(1926-2005)が1969年に教授に昇格。以降、横山が逝去する1973年まで、横山教室、上野教室、加山教室の3つの教室で、それぞれの個性豊かな授業が行われていました。1970年には堀文子(1918-2019)が多摩美日本画専攻初の女性教員となり、その後、教授に就任しました。

1980年代前半に在学し、上野教室で学んだという武田先生は「課題制作においても、常に先生方は学生たちの自由な発想を重視して下さいました。これは多摩美に日本画専攻ができた当初から続く伝統であると聞いています。現在では模写や裏打ちといった実習もカリキュラムに組まれているのですが、私の時代は技術的なことだけでなく、『何を、いかに描くか』について悩み、模索を続けるような授業が行われていました。自分の意思で力強く描きなさいと、教員は背中で語っていたように思います」と、当時を振り返ります。それと共に、教え子の作品に対しては、妥協は一切なしの指導が行われており、何度も挫折を味わったとのこと。「教員になった今、やっとその厳しさの意味が分かるようになりました。当時の先生たちは、学生であっても一人の表現者として、自分たちと対等に考えていたのだと

武田州左 教授
1985年多摩美術大学日本画専攻 卒業
2007年本学准教授、2013年から現職

加藤良造 教授
1987年多摩美術大学日本画専攻 卒業
2016年本学准教授、2018年から現職

八木幾朗 教授
1982年多摩美術大学大学院美術研究科 修了
2018年から現職

思います。自分の中に眠っていた感性に気付き、作家として創作活動を続けてこられたのは、そうした先生たちの指導のおかげです」

武田先生の2年後輩にあたる加藤良造先生も同様に、「自分が何をやりたいのか。まずそれを考えさせることからスタートする授業でした。興味があるところを探して、どう表現していくか。自分で道筋を立てながら描いていきましたね。たとえそれが日本画の技法を逸脱していたとしても、表現の中で必要と判断できれば認めてもらえる。面白い方を評価する雰囲気が当時からありました」と語ります。

八木幾朗先生は高校時代に横山操の作品に魅了されたことがきっかけで多摩美に入学したといいます。「直接横山先生の指導を受けることはかないませんでしたが、『花の画家』とも呼ばれ、生涯において自然をモチーフに作品を描き続けた堀文子先生のクラスに属し、加山先生そして上野先生にも教えを仰ぎました」

八木先生が在学した1970年代後半は、横山亡き後の多摩美日本画で加山が奮闘していた時期。学生と一緒に夢中になって制作する中で、初めて『裸婦』を発表し、それまでの日本画にも、西洋画にもない、加山ならではの線の美しさが話題となりました。また、加山ばかりでなく、当時の教員全員が作家として最も充実していた時代でもあり、多摩美で共に過ごせたことが、何よりの「財産」になったといいます。

『タマビDNA』第一世代の証言
教育者としての加山又造と横山操

加山又造と横山操が多摩美の日本画教育に携わった時代に本学に在学し、直接二人から薫陶を受けた『タマビDNA』第一世代である本学名誉教授の米谷清和先生は、今回のDNA展で上映された動画インタビューの中で、教育者としての二人を次のように振り返ります。

「二人とも作家を育てようという信念は同じでした。横山先生は、せっかく美大に入ったのだから卒業したら教員になれるくらいの知識は持たせるべきだという考えの下、率先して基礎的なことを実践して見せるタイプの先生で、一方、加山先生は、自分が教師をやっている間に一人すごい絵描きを育てることこそが教育者としての価値であり、使命と考えていたように思います」

学生を引っ張っていこうとする横山と、才能ある者は自ら伸びてくると考えていた加山。両者の教えを享受しながら、学生たちは作家としての感性を磨き、人間としても成長していきました。

「講評会で評価が分かれた時など、二人は延々と議論を繰り返すわけです。時には芸術論にまで発展し、とことん熱くぶつかり合っていました。本心をさらけ出せたのは、二人の間に強い信頼関係があったからでしょう。価値観が違うのは当たり前ということを、あえて学生たちに見せていた。自由に言い合える面白さが、学生の気質や日本画専攻の気風に受け継がれているのではないか」

同じく『タマビDNA』第一世代であり、2016年まで本学で務めた名誉教授の中野嘉之先生も、DNA展の動画インタビューのなかで当時のエピソードを次のように語っています。

「よく横山先生に『頑張れよ』と声を掛けていただきました。どうにもならなくなってしまったときに、タイミングよく背中を押してくれるようなところがありましたね。情が深い先生でした。逆に加山先生は、谷底に突き落とすようなところがありました。谷底から自力ではい上がることができたのは、厳しさと優しさの両方の支えがあったからこそだと感じています」

作家としての経歴は対照的でありながら、権威に寄りかかることなく個の力を磨くことを重視し、ひたすら「絵描きとして大切なもの」を示し続けた加山と横山。上下関係に縛られることなく、時勢に左右されない教育の在り方は、自由な創造性に満ちた本学の日本画教育へと発展し、現在のカリキュラムにも受け継がれています。

作品指導をする中野嘉之（前列中央）と米谷清和（前列右から2番目）

各自の主体性、創造性を重んじる教育が継続中

百合のかたちを借りて「何か」を表現する

本学日本画専攻では、1年次の最初に「白い百合」の制作に取り組みます。日本画に用いる胡粉(ごふん)という白色顔料をはじめ、岩絵具や膠(にかわ)など、素材の扱い方や伝統的な技法の習得に非常に適しているためです。

この課題を通じ、学生たちは日本画の技術を一通り学びます。そして基本を習得した後は、各自が描きたいものを描く自由課題がスタートします。

東京藝術大学出身の宮いつき先生と岡村桂三郎先生は、多摩美の歴代の卒業生たちが描いた作品を見た時の驚きをこう語っています。

「最初の課題で白い百合を描くのは、あくまでも日本画の基礎となる技術習得が目的です。ですから白い紙の地に百合の花だけを描けばいいわけですが、多摩美生たちの制作アルバムを見ると、花の描写だけでなく背景までが描かれていました。今の学生たちも同様で、女の子が百合を持っていたり、百合の後ろに宝石を描いていたり。どの課題からも、一表現者として作品に仕上げようとする意思が感じられました。私が藝大で白い百合を描いた時には、学生はただ単に描写的に花を描いていました」

技術より表現が優先され、最初から絵作りをしようとする作風に多摩美らしさを感じたと語る宮先生。

また、岡村先生も同様の印象を抱いたといいます。「もともと百合の花の課題は藝大のカリキュラムが元になっているようですが、私も藝大生の時には背景などは描かずに、百合の花だけを描いていました。技術的な指導も多摩美とは少し違っていて、藝大の日本画素材に関する考え方は、伝統を継承していくようなところがありました。自由課題が多い多摩美のカリキュラムの中で、最初からモチーフが決まっているということ自体が珍しいことですが、その意図は、百合のかたちを借りて、『何か』を表現することだと理解しています」

宮いつき 教授

1978年東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻 卒業
2005年本学造形表現学部造形学科助教授
2007年同教授、2017年から現職

岡村桂三郎 教授

1985年東京藝術大学大学院美術研究科 修了
2000年　東北芸術工科大学教授
2009年から現職

千々岩修 准教授

1997年多摩美術大学大学院美術研究科 修了
2011年本学講師、2016年から現職

藝大出身の先生から見た“多摩美らしさ”とは？

「個人個人が興味を持ったものを非常に強く支持する方針が多摩美にはある」と分析する宮先生。

「例えば、日本画専攻の学生が『水性ペンで描きたい』と言って、ずっとペンを使って作品を作っていたとしても、それを良しとします。『日本画の画材も使ってみない？』と言っても『嫌だ』と言われればそれを受け入れる柔軟さがあるんですね。私が学んでいた頃の藝大では許されないことでした。その学生の好きな道を進ませる自由さが、多摩美らしさだと思います」

「枠」にとらわれない多摩美の校風について岡村先生は、「藝大は伝統や因習を引き継ぎながら学んでいく傾向があるように感じました。その中から多摩美の同世代の人たちの作品を見てみると、すごく新鮮でキラキラと輝いて見えたんです。当時、多摩美の人たちからは、藝大は優遇されていてうらやましいと言われましたが、僕にとって多摩美の学生は、常に自分らしく、個性あふれる作品をのびのびと制作しているように見えました」と話しました。

表現者として課題を「作品」に仕上げる伝統

1年次に白い百合を描く課題は、日本画の基礎的な技術を習得する目的だが、作品に仕上げようとする気概は多摩美OBの先生方の在籍時から変わっていない。

武田州左教授の作品

画面の大きさは「描きたい欲求の大きさ」

画家としての大作志向は、加山・横山の時代から継承されている本学日本画専攻の特色の１つです。今も学生たちは、１年次からアトリエの一面を使って大作に取り組んでいます。

「細かいことは気にせずに、大胆に刷毛を使う醍醐味を体験し、早いうちから作家としての世界を広げてほしいと考えています。作画技術の向上より、まずはのびのびと描くことを重視します」（千々岩先生）

あくまでも作家志向を前提としたカリキュラムは、伝統的な日本画の技術習得のみの授業とは一線を画すといいます。

「かつての『刷毛目が残らないように美しく塗る』ことを求める考えに対し、私の恩師である上野先生は『それだけではない』とよくおっしゃっていました。事実、先生は刷毛も筆も使わず、手で直接画面に絵具を塗る独自の表現を追求しておられました」（武田先生）

画面の大きさは「描きたい欲求の大きさ」であり、身体感覚の全てを駆使して生き生きと描き切ること。大作の系譜は、多摩美の日本画が育んできた特質であるといえます。

大画面と対峙しながら思いのままに筆を動かす

日本画のアトリエで大作に取り組む学生たち

八木幾朗教授の作品

加藤良造教授の作品

千々岩修准教授の作品

1977年頃のコンクールの講評会。手前から堀文子、加山又造、山本丘人、上野泰郎、市川保道、桝田隆一、米谷清和

コンクールの経験が、作家として生きる素地となる

多摩美日本画のもう一つの特色は、春と夏に行われる年２回のコンクールです。長期休暇期間に学生が自由に制作した作品を教員たちが審査するというもので、多摩美日本画では、加山・横山が教員となる以前から続いています。

1964年に入学し、当時の様子をよく知る中野嘉之先生は、前述の動画インタビューの中でこのように語っています。「昔も今も形式は同じです。でも、昔の方が学生の人数が少なく、全員で10人程度でした。少人数だったにもかかわらず、現在の講評会と同じくらいの時間をかけて、先生たちが学生一人一人の作品について講評してくれました」

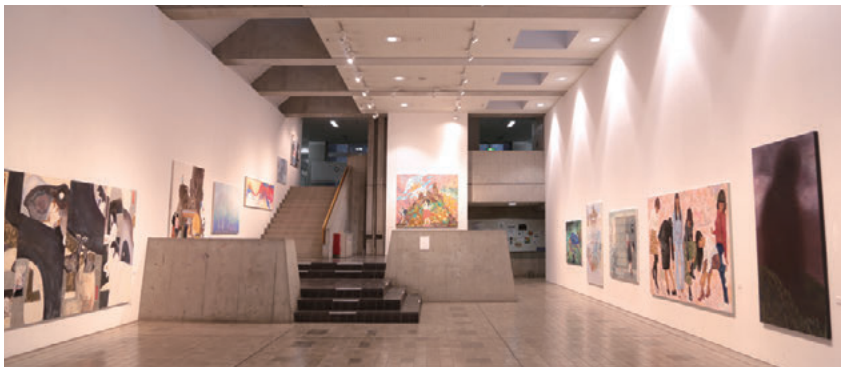
なかなか意見がまとまらず、深夜までディスカッションが続くことも。教え子の前で芸術論を戦わせるその姿に、学生たちは皆、心を引き締め、創作への思いを新たにしたといいます。

「あまり褒められることはありませんでしたが、絵について真剣に語ってもらえることがとてもありがたかった。学生としてではなく、作家として作品を見てもらっている感覚がありましたね。時には『何だ、これ』で終わることもあったのですが、なぜだろうと自分で考えるきっかけになるんですよ。コンクールの経験は、作家として生きる素地となったように思います」（加藤先生）

現在でも、多摩美のカリキュラムの軸は何といっても春と夏のコンクールにあります。宮先生はコンクールの位置付けについてこう述べています。

「１年から４年まで全員が課題に取り組み、コンクールに作品を出さないと留年になります。学生は休みの間に作品を仕上げ、コンクールで高く評価されると、作品が絵画北棟１階のロビーに飾られるので、精力的に良い作品を仕上げてきますね」

中野・米谷両先生の授業を受け、講評会でも多くの助言をもらいながら自己の作品と向き合ったという千々岩先生は、「講評会の時に、米谷先生がふと、『横山先生だったら何と言うだろうか、加山先生なら、どう答えるのだろうか』と自問する姿をよく目にしました。私自身、講評会の時には『中野先生だったら、米谷先生だったら何と言うだろう』と考えることがあります。先生の姿は今も自分の中で大切なよりどころとなっています」と話しました。



コンクールの優秀作品は絵画北棟１階ロビーに展示される

さらに超え続けるために

『タマビDNA』新時代へ

2000年、『タマビDNA』第一世代の中野・米谷両先生が、時代の変化と学生の要望に応えクラス制から学年制へとカリキュラムを改編。現在の本学日本画専攻は、『タマビDNA』を受け継ぐ武田先生、加藤先生、八木先生、千々岩先生に、宮先生、岡村先生がもたらす新たな遺伝子が異種配合され、ハイブリッド化が進行する新時代を迎えています。

制約があるからこそ創意工夫が生まれる

「現在の学生たちは非常に優秀です」と語る武田先生。学力も高く、理解力に優れた学生が多いといいます。

「その強みを生かし、専門性の高い日本画の世界で粘り強く、新たな領域を目指して作品を作り続けてほしいと考えています。学生時代は、壁にぶつかり、思い悩むことも多いでしょう。しかし、千年途絶えることなく受け継がれてきた日本画の知恵の中には、迷いに対する答えが必ずあるはずです。行き詰まった時には、深い森に包まれた八王子キャンパスの風景にも目を向けてみてください。そこにある豊かな自然と向き合い、対話してほしい」と語ってくれました。

学生の時にこそできることがある、というのは千々岩先生。

「学生たちは、日本画を学びながら身に付けた技法を用いて、斬新な作品を次々と生み出しています。日本画の技法には制約があるからこそ、創意工夫が生まれるのだと思います。日本画の基礎を身に付けながら、その枠を超えようとする力を養い、ゆっくり手間をかけ、丁寧に思考を重ねながら慌てずに描いてほしいと考えています。時間のある大学時代にこそ、表現者としての自信を培ってもらいたいのです」

失敗を恐れないフットワークの軽さが、多摩美生の大きな魅力

「多摩美生は迂闊(うかつ)とよくいわれますが、それは長所でもあります。失敗を恐れないフットワークの軽さは、多摩美生の大きな魅力です。日本画の歴史は今も時代の流れの中で動き、常に変化しています。そして優れた作家ほど変化することを恐れません。多様性が問われる今こそ、次なる新しいものを生み出すチャンスでもあります。日本画を自分なりの解釈で追究し、多摩美らしさを武器にチャレンジしてほしい」と加藤先生は語ります。

2021年6月25日に行われた講評会の様子

作家はまず自分で手を動かすことが大切だと考える宮先生。学生へのメッセージにも自身の思いがこもります。

「今の学生は、iPadで下図を描いてくることもあるのですが、日本画の素材を粘り強く使い続けてみると、発見と驚きを実感できると思います。日本画は手作業が多く、デジタルのように光の3原色では表し切れない複雑で奥の深い芸術です。粒子がこぼれ落ちて消えてしまうことのない日本画の技法を使い、面白くなるまでとことん手を動かしてみてください」

自分なりの判断で新たな絵を生み出す

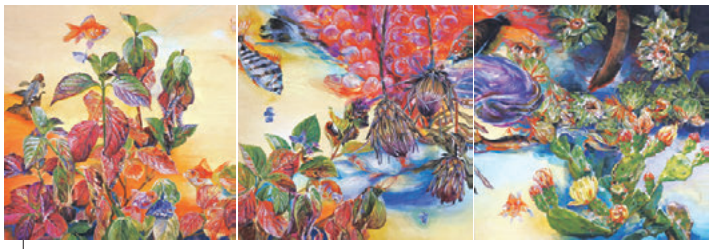
「絵を描くために大事なことは、心を空っぽにして自分を見つめること、それを素直に眺めることにあると思います。今は、絵画への付加価値などが求められ、社会が若い作家たちに求めることも多くなりがちな時代ですが、自分なりの判断で切り捨てていかないと、新たな絵は生まれません。人類は何万年も前から絵を描いてきました。社会のためではなく、食べたり寝たりするのと同じように、生きるために絵を描いてきたのです。悩んだときにはこの原点に立ち返り、よく食べてよく寝ること。健康であることは、学生の創作のスタート地点です。自己肯定感を持ちながら、豊かな気持ちで創作に向かってほしいと思います」と岡村先生はエールを送ってくれました。また、八木先生は、加山・横山時代の情熱は、変質しながらも今の世代に受け継がれている、さらに美術とは「純粋さ。そして熱中する力」であるといいます。

「かつて学生だった時代に僕たちが受け継いだもの。それは、一言でいえば、作家としての情熱や絵画に対する誠実性です。それを伝承した者だけが残り、次の世代へと意思を伝えていくのだと思います。何かを熱心に描く姿や、言われた以上のことをやっている学生の作品に惹かれますね。バランスは悪いかもしれないけれど、何かに真剣に取り組む構えは、熱意となって作品ににじみ出てくるんです。そういうことが人を感動させる原動力になる。芸術とは、名誉や売り絵を描くこと以上に、大事なことを世の中に伝える役割があるんです」

時代を超えて躍動する『タマビDNA』卒業生たちの活躍

過去から受け継いだ遺伝子は、
現在に至るまで多様な展開を遂げ、
日本画をベースにしながら幅広い領域で活躍する
アーティストを次々と生み出しています。

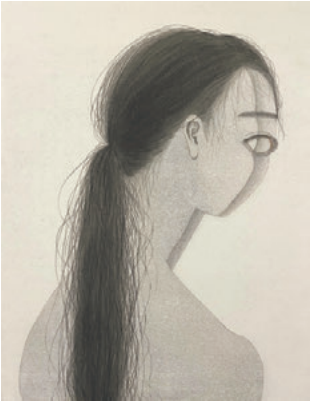
第８回東山魁夷記念 日経日本画大賞受賞



《播種》2021年　各72.8×72.8cm 3枚組　**谷保玲奈**(2012年修了)

神奈川県横須賀市に在住し、身近に目にする海洋生物や植物などをモチーフに、自然から得る感動をテーマに作品を描く谷保さん。小学１年から中学２年までドミニカとボリビアで約６年間を過ごすというユニークな経歴を持つ。次世代を担う新進気鋭の若手作家として注目され、第８回東山魁夷記念 日経日本画大賞(2021年度)他、受賞歴も多数。日経日本画大賞受賞に関する記事はQRコードからご覧いただけます。

日本画の素材と技法にこだわり自画像を描く



《みてる人 16》2015年　53.0×41.0cm
三毛あんり(2014年修了)

鏡や写真、他人の目に映った自分の像を変形させ、「自画像」として描き出す三毛さんは、現代美術の領域で肖像画を発表しています。本作は、大学院修了時から現在まで継続して描いてきたシリーズ作品の一作。和紙、膠(にかわ)、水墨、岩絵具といった日本画の素材と技法で創作することにこだわり、独特の世界観を表現しています。

日本画の素材の特徴とその表現方法を追究

《ひむろ》2014年　181.5×113.5cm
杉岡みなみ(2016年修了)

海や水に関連した作品を多く手掛けてきた杉岡さん。日本画の素材の特質を熱心に研究し、試行錯誤を重ねながら到達した表現手法が評価されています。創作活動と並行して、2021年４月、目黒区中目黒にオープンしたギャラリー『ヘルツアートラボ』の立ち上げや運営にも関わり、展覧会や造形講座など、さまざまな角度からアートの魅力を発信中。

多岐にわたるメディアで精力的に活動

《八犬伝—DF》2019年 182.0×546.0cm　**千葉大二郎**(2014年卒業)

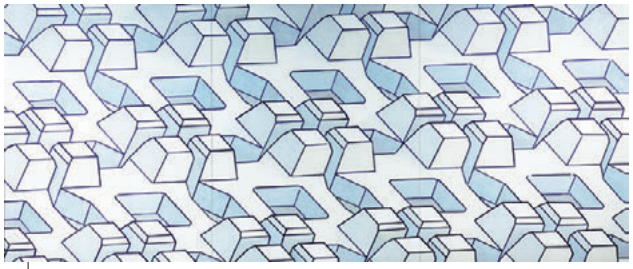
平面作品を中心に創作を手掛ける傍ら、アートプロジェクト『硬軟』としてパフォーマンス活動を行うなど、多岐にわたるメディアで精力的に活動する千葉さん。本作は、５メートル超えの大作。独自の解釈で日本画の「今」とその無限の可能性を探る若手作家の一人です。

自然観察を重ね、自らの作品と向き合う

《凛然》2010年　145.5×72.7cm
堀江栞(2014年卒業)

動物や人をモチーフに作品を描く日本画家。自然観察を重ね、思うままに描くことを大切に自らの作品と向き合います。第26回五島記念文化賞美術新人賞(2015年)を受賞し、奨学生として１年間パリで滞在制作を行い、帰国後、国内で幅広く活躍中。

日本画とデザインを融合させた斬新な創作



《ホロースケヤー３》2020年 100.0×240.0cm　**並木夏海**(2015年卒業)

街の風景や反復した形を、主に岩絵具を使って和紙やアクリル板などの上に表現。グラフィカルで現代的な作品を次々と生み出しています。本作は、無機質な消波ブロックをテーマにしながら、岩絵具によるスモーキーな色味を生かしたもの。平面にとどまらず立体作品にまで創作の幅を広げる並木さんの、日本画とデザインを融合させた斬新な取り組みに期待が寄せられています。

『タマビDNA』が切り開く卒業後の多彩な進路

自由な発想力や鍛えられた表現力が、卒業後の活躍の場を広げています。画力を生かし、スタジオジブリやユーフォーテーブルなどの人気アニメーションスタジオで背景美術として活躍したり、妖怪ウォッチのキャラクターデザインなどを生み出したり、コロプラやコナミなどのゲームメーカーで3Dデザイナーやゲームデザイナー職に就いた卒業生も。また、絵画やグラフィックの作画補修、フィギュア造形補修といった美術系技術者になる人も多く、大学の学びの中で培った技術や感性を生かして、さまざまな分野の第一線で活躍しています。『タマビDNA』とは時代を超えていく力。その壮大な系譜は現在進行形です。

他学科の先生から見た「タマビDNA」展

多摩美術大学美術館 特設サイト
「現代日本画の系譜 タマビDNA」

教師としての加山・横山の作家像が垣間見えた印象深い展覧会

油画専攻
村瀬恭子 教授

会場内で流されていたインタビュー映像により、教師としての二人の画家、加山又造と横山操が初めて身体を持って姿が立ち上がった。加山氏の猫のスケッチ、何枚もトレースするように引かれた線、点で線をつづる箇所を見つけて、本画である彩色画を見るよりも作家像が垣間見えるような気がして印象に強い。先日「ボイス+パレルモ展」を観覧したところだったが、同時代にドイツのアカデミーで師弟関係にあった二人の作家、1本のドキュメンタリーを観終わるような展覧会構成で作品への視点が示されたようだった。展覧会を訪れて作品の前に立っていた作家の体臭のようなものを発見する経験は喜びだ。多摩美の油画科ではどんな出会いがあったのだろうかと思いを巡らした。

発見と学びのある有意義な機会

油画専攻
日野之彦 准教授

個人的には、やわらかい筆で丁寧に描写している絵に惹かれました。展示されている一つひとつの作品の描かれ方がどれも違っていて、手で描かれていることの魅力を会場全体から感じました。会場で流れていた映像では、現在の先生方が学生の頃のエピソードや先生から掛けられた言葉について具体的に語っていて、内容が生々しく興味深かったです。

日本画専攻は油画専攻と同じ絵画学科ですが、油画専攻ではあまり見ないような思いがけない形や筆運びを見てとることができて新鮮に感じます。今回のように他領域の作品を展覧会で実際に見ることができると、見る人自身がそれぞれに、その時の自分にとって大事なことを発見し学びとることができるので、このような機会は有意義に思います。

未来を見据え、世代を超えて自由を競いあう作品たち

グラフィックデザイン学科
佐賀一郎 准教授

日本画とは異なる領域に身を置く私にとって、「タマビDNA」展で展示された作品の数々は、世代を超えて互いに自由を競いあっているようでした。タイトルにある「DNA」という言葉は、一種の謎かけのようです。多摩美の日本画の、何が変化したのか／しなかったのか。また、加山又造と横山操の二人から現役世代までの作品が集められた本展からは、未来を見据えようとする意思も感じられます。まさにそのような意思が、つまりこの展覧会の動機／コンセプト／内容自体が、多摩美のDNAを表しているようにも思えます。本展がこのタイミングで開催されたことの意味を考えさせられます。自分は一体何を見たのか。大きく考えさせられる展覧会でした。

加山・横山の感性と美を超えて受け継がれる『DNA』

プロダクトデザイン専攻
安次富隆 教授

数年前に加山又造の作品集をじっくりと見る機会があり、デザインとして、その洗練された構図や美しいライン、色彩に、非常に心を惹かれました。横山操は力強い富士山の絵の記憶が鮮明に残っています。その二人の教えを受けた中野嘉之先生、米谷清和先生は大学で親交がありました。中野先生には2019年に私がデザインディレクションと照明演出を担当した昭和大学の緞帳製作で富士山の原画を描いていただいたのですが、その迫力は横山の富士山を超えていると感じました。米谷先生の展覧会に何度か足を運んだ際、横山の影響を感じましたが、二人のDNAの受け継ぎ方がかなり異なっていることを興味深く思っていました。本展を観て図録の木下先生の論考を読むと、その理由がわかったような気がします。岡村先生の半立体画のような作品は大変魅力的で、本学への着任は新たな『タマビDNA』としてロバスト性を高めたものと確信しています。

多摩美のDNAは学科・専攻を超えて存在する

テキスタイルデザイン専攻
柏木弘 教授

印象に残った作品は、強い輝きを放つ上野泰郎先生の作品、揺らめく水面の表現をいつまでも観ていられる北村さゆりさんの『映・春の風』、そして美術館1階の陳芃宇さんの『繋がった日から』も圧巻であった。

初めて観る作品が多かったが、画材と画題において日本画の伝統を継承する優れた作品から、素材やテーマ、表現方法も日本画からは逸脱した斬新な作品まで鑑賞することができた。一見同じ遺伝子を持つとは思えない多様性こそが日本画専攻のDNAなのだろうと納得し、眼福にあずかることができる素晴らしい展覧会を拝見した。しかし、学科・専攻を超えた学生や、世代の違う卒業生たちにもそれぞれに簡単には消し去れない多摩美のDNAが存在するのであろうなと想像力を刺激してくれる展覧会でもあった。

隠れた遺伝物質から発現した作家たちの驚くべき多様性（エピジェネティクス）

メディア芸術コース
久保田晃弘 教授

「タマビDNA」展の、特にアートテークギャラリーにおける、より新しい世代の作家の作品群から感じたのは、大学教育におけるDNAである、長い歴史を有するカリキュラムという隠れた遺伝物質から発現した、エクリチュールの驚くべき、そして豊かな多様性である。それに対して、90年代に生まれたメディアアートは、はるかに若くいまだ幼い。そこには、DNAのような安定した自己複製物質は未だ存在せず、マイナス70℃で保管しなければならない新型コロナワクチンに用いられているような、そして原始地球上に存在したと仮定されているような、不安定なRNAが激しく分解・変異・融合・合成し続ける「RNAワールド」の状態が今なお続いている。ぜひ次の機会には「タマビRNA」展の開催を！

進取の気性に富んだ創造性の高さこそ日本画専攻の特徴

芸術学科
小川敦生 教授

本学の日本画専攻は進取の気性に富んだ創造性の高さを特徴としてきたということを、かねてから認識していた。実際に「タマビDNA」展を見て、表現の多様性こそが『DNA』であるという、字義の深さを考えさせてくれる展示内容に感心した。多世代にわたる作品のほかに、本展のために制作された映像資料を視聴し、加山又造と横山操という、まったく作風や思考の異なる二人の日本画家が同時期に教鞭を執っていた点に理由を探り出せた。それも、この展覧会の非常に大きな成果だったと思う。挙げるべき秀作は枚挙にいとまがないが、加山又造の《倣北宋水墨山水雪景》が特に心に残った。創造の原点に模倣があることを改めて認識させてくれたからだ。

日本画のダイナミズムを明快に、最大限に発揮した展覧会

共通教育
椹木野衣 教授

日本画はとかく「伝統」や「継承」と結び付けられやすい。けれども、実際には近代日本に生まれた比較的新しい芸術の分野なのだ。西欧からの技法やイメージもたっぷり伝授されている。言い換えれば、とかく消極的に指摘されがちな日本画の定義のあいまいさは、実は日本画最大の魅力でもあり、可能性でもあるかもしれない。そんな日本画のダイナミズムが、本展では明快に、最大限に発揮されていたと思う。だからこそ『DNA』なのだろう。遺伝子に伝統も継承もない。あるのは高分子からなる多様な写像と、おのずと生じる誤読と突然変異だ。その全てを受け入れるなら、種は未知なる未来へと開かれる。今回のDNAモデルを通じて、タマビNihongaにさらなる未来の自由と意力を！

トピックス

創造性と美意識を社会とつなぐ場「Tama Art University Bureau(TUB)」を開所

4月1日、東京ミッドタウン・デザインハブに本学が持つ創造性と美意識を社会とつなぐ場「Tama Art University Bureau(TUB)」を開所しました。コンセプトは“まじわる・うみだす・ひらく”。①さまざまなステークホルダーや企業、社会人と行うオープンイノベーションによる新しい価値の創出 ②学生だけでなく子どもから社会人まで幅広い層に向けたデザインやアートのプログラムの提供 ③学生作品の展示・発信という3つのアクティビティを通じて、アートやデザインの力を社会に対して開いていく場を目指します。4月15日〜5月5日にはこけら落としとして第1回企画展「中継地点」を開催。多摩美を起点にグローバルで活発な芸術文化の発信を行う卒業生7組によるデザインとアートを展示しました。5月にはオープンイノベーションの第一弾として、SDGs時代の廃棄物循環型経済モデルの構築をめざす共創プロジェクト「すてるデザイン」の始動を発表。株式会社モノファクトリーをハブにしながら、伊藤忠リーテイルリンク株式会社、株式会社ナカダイ、ブックオフコーポレーション株式会社、プラス株式会社などと産業廃棄物に新しい価値や意味を与えるサーキュラーエコノミーに向けた取り組みです。これに関連し、6月には第2回企画展「すてるデザインの生まれる場所」展を開催。学生が廃棄資材を用いて作品制作に取り組む「生のプロセス」を見せる企画で、ブラックボックスな印象がある創造行為に対し、新たなイメージを提示しました。

第1回企画展「中継地点」

「すてるデザイン」に関連した第2回企画展での公開講評会の様子

横浜ベイブリッジをデザインした大野美代子の研究展を開催

6月21日〜7月7日、八王子キャンパスアートテークギャラリーで環境デザイン学科主催・大野美代子研究展「ミリからキロまで」が開催されました。東京大学・法政大学で工学を専攻する学生らとの4月からの共同研究の成果発表展で、インテリアデザイナーを経て横浜ベイブリッジなど全国各地の名橋をデザインした63年デザイン卒業・大野美代子さん(1939-2016)の仕事を通して、「自分ではない誰かのためのデザイン」について学生たちが独自の視点で発掘。美大の学生と土木工学を学ぶ学生の視点の違いや思考プロセスなどの違いを認識しながら、蓮根歩道橋の模様デザインや陣ヶ下高架橋の特徴的な橋脚デザインを再現した作品などを制作し、空間を最大限に生かしたアイデアあふれる展示を行いました。

大野美代子研究展「ミリからキロまで」

テレビ東京『新 美の巨人たち』が卒業生の和田誠・大野美代子を特集

テレビ東京系列の美術系教養番組『新 美の巨人たち』で、2週にわたり卒業生が特集されました。6月5日の放送はイラストレーターで59年図案卒業・和田誠さん(1936-2019)、6月12日の放送は橋梁デザイナーの大野美代子さん。それぞれ亡くなられた後、関係各所から貴重かつ膨大な一次資料を本学に寄贈いただいており、保存・管理しているアートアーカイヴセンターなど八王子キャンパス内で撮影が行われました。

学生支援の一環で学生食堂の利用代金を半額に

保護者の家計急変、アルバイト収入の減少など、コロナ禍の長引く影響を懸念し、4月より学生食堂の利用代金の半額を大学が補助しています。生活の基本である「食」を支え、学業の基本である「制作・研究時間」を確保してほしいとの考えで、上野毛・八王子両キャンパスの学生食堂の全メニューを対象に7月21日まで実施する予定です。利用回数の制限はなく、今後の状況によっては期間の延長も検討しています。
※各学生食堂ではパーテーションの設置や黙食の推進などの感染対策も実施しています。

版画専攻、環境デザイン学科の英語表記を変更

今年度より版画専攻の英語表記を「Printmaking course」から「Graphic Arts course」に、環境デザイン学科は建築を加えた「Department of Architecture and Environmental Design」に変更しました。

起業家人材を育成する社会還元加速プログラム(SCORE)に共同機関として参画

早稲田大学を主幹校に、本学、東京理科大学、東京農工大学、神奈川県立保健福祉大学、三菱電機株式会社を共同機関とし、48の大学や企業等を外部協力機関とするプラットフォーム「Tokyo United Network for Innovation with Technology and Entrepreneurs (T−UNITE)」が、3月19日、国立研究開発法人 科学技術振興機構(JST)の社会還元加速プログラム(SCORE)大学推進型(拠点都市環境整備型)に採択されました。本プログラムは、大学から生まれる優れた技術シーズの実用化や起業家精神(アントレプレナーシップ)指導人材の育成を強力に支援するものです。コロナ後の社会変革や社会課題解決につながる社会的インパクトの大きなスタートアップが持続的に創出される体制の構築を目的としています。

メディアセンターがAdobeのオンライン版講座を活用した学生サポートを実施

全学生のデジタル制作を支援するメディアセンターで、アドビ株式会社の「デジタルクリエイティブ基礎講座オンライン版」を活用した学生サポートがはじまりました。コロナ禍においても学生たちの「もっとスキルアップしたい、デジタルリテラシーを高めたい」という意欲に応えます。また、授業支援にも活用することで、新入生などを対象とした授業で使い方のレクチャーを行っていた一定の時間を、美術教育そのものに充てられるようになりました。

情報デザインの学生がルイ・ヴィトンらと連携授業

情報デザインコース(担当教員:宮崎光弘教授)が、ルイ・ヴィトン ジャパン株式会社および一般社団法人Think the Earthとの連携授業を行いました。ルイ・ヴィトンのコレクションで使用され役割を終えた造花をリユースまたはアップサイクルすることで新たな価値を生み出す提案をするというテーマに、社会デザイン領域を学ぶ3年生14名が取り組みました。1月8日の最終成果発表にはルイ・ヴィトンのサステナビリティー ディレ

クターの田口景子氏、Think the Earthのディレクターでもある上田壮一客員教授らがオンラインで参加。さらに3月2日には、ルイ・ヴィトン ジャパン本社でも発表し、CEOらから複数の賞を授与されました。学生が制作した発表時の動画を大学ホームページで公開しています。

『VASE for ARTIFICIAL FLOWER 造花のための花瓶』秋山怜美

情報デザイン×BIGLOBE「もうひとつの通信」をテーマに、新たな利用方法をデザイン

通信技術の歴史や近未来の技術を知り、これまでにない通信方法を再発明する――情報デザインコース「メディアデザインⅠ」(担当教員:永原康史教授、清水淳子講師)では、3年生ら30名とインターネットサービスプロバイダーのビッグローブ株式会社との産学共同研究プロジェクトが、この4月から進行中です。永原教授による通信史のレクチャーや同社データセンターの見学などでインプットした知識をもとに、それぞれが構想を練り、人の気配を感じられるデバイスなど「もうひとつの通信」をテーマとした作品やプロトタイプを制作しています。7月のオープンキャンパスで公開講評会が開催されるほか、同社での学外発表も行われる予定です。

4月に行われた初回レクチャーの様子

森林の環境問題をテーマに学生がデザインした「美作材」の家具が東急ハンズで販売

環境デザイン学科と岡山県津山市のつやま産業支援センターとの産学官共同研究「つやま家具プロジェクト」で、学生たちが森林の循環不全という環境問題をテーマに流通の仕組みから考案した椅子など5種類のプロダクトデザインが、4月、東急ハンズ新宿店で展示販売されました。津山市の家具メーカーや木製品加工メーカーが製品化したもので、特産の木材「美作材」が使用されています。昨年3月に学生も参加するかたちでの展示販売会が実施される予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け開催直前で中止になったもので、1年越しの販売となりました。

展示販売された製品の一つ「TSUYAMA CLIP」

樹脂の可能性を追求する産学共同研究でサステナブル製品の開発に取り組む

プロダクトデザイン専攻studio1では、2018年より長瀬産業株式会社との産学共同で樹脂の可能性を追求する研究を行っています。「Tritan™(トライタン)」という最先端の透明な樹脂について、使用すべき新たなニーズを探り具体的な提案を行うもので、2年目は長瀬産業のオーナー企業にあたるカシオ計算機株式会社、花王株式会社、エレコム株式会社の3社に、3年目は株式会社アルビオン、株式会社ポーラ、株式会社資生堂の3社に対し、それぞれの顧客ニーズに対応するリアリティを追求したプロダクトデザインを制作しました。4年目となる今年は、コスメ系企業、ベビー用品系企業の2社に対する「Tritan™」を用いたサステナブルな製品および運用スキームの開発をテーマとした共同研究を7月にスタートする予定です。

昨年度に制作したアルビオンのコスメパッケージ

グラフィックデザイン学科が田中一光ポスターコレクション展など多彩な企画展を開催

5月から6月にかけて、グラフィックデザイン学科が八王子キャンパスアートテークギャラリーで3つの多彩な企画展を開催しました。世界的なグラフィックデザイナーとして活躍した田中一光の作品を展示した「田中一光 The POSTER」では、2018年に公益財団法人DNP文化振興財団から本学に寄贈された作品のうち代表作155点のオリジナルを公開。デザイン創造の本質を展観しました。同時開催の「第2回タマグラ・ポスター展『POSTER　NIPPON』2021」では、グラフィックデザイン学科の学生が『JAPAN』『日本』『NIPPON』のいずれかを表記することだけを条件に自由な発想で制作。学内審査を経て選ばれた優秀作品50点を展示しました。グラフィックデザイナーである木下勝弘教授の退職記念展は、展示デザインを手掛けた「田中一光 The POSTER」の会場造作をそのまま引き継ぎ、「田中一光へのオマージュ」シリーズのB倍判ポスター14作品を中心に、ポスター160作と書籍30冊で構成された華々しい展覧会となりました。

木下勝弘教授 退職記念展「POSTER & BOOK DESIGN」

令和3年度入学式で俳優の森岡龍さんが登壇

4月5日、令和3年度の入学式が行われました。新型コロナウイルス感染症対策により、学科・専攻ごとに学内で会場を分散して実施しました。校友会代表祝辞は俳優で11年映像演劇卒業・森岡龍さんからいただきました。森岡さんは昨年度に入学式が中止になった新2年生にも祝意を述べるとともに、「文化芸術はぼくらが生きていくうえで必要不可欠な心のワクチン。皆さんの創作活動と格闘の日々に健闘を祈ります」と激励の言葉を贈りました。式典の模様は大学公式YouTubeチャンネルで公開中です。

森岡龍さん

修了生が保育園の空間デザインにアーティストとして参加

12年大学院テキスタイルデザイン修了・小林万里子さんが、埼玉・東浦和の地域特性をストーリー化した「マロカル保育園」の空間デザインにアーティストとして参加しました。水と自然が豊かな地域で、古くは龍伝説もある東浦和の自然の生き物や植物などをデザインに取り込み、日常的にアートに触れることができる、子どもたちの五感を刺激する保育園を作りあげました。

小林さんが手がけたマロカル保育園の一室

受賞

卒業生が「第28回伝統工芸諸工芸展」で文部科学大臣賞を受賞

97年立体デザイン卒業・大槻洋介さんが「第28回伝統工芸諸工芸展」で文部科学大臣賞を受賞しました。公益社団法人日本工芸会の主催によるこの公募展は、日本に古くから伝わる七宝・硝子・硯・砡・截金・砂子などの技法の保護保存と後継者の育成を目的に隔年で開催されているものです。7月7日〜12日の間、東京・日本橋三越本店本館6階美術特選画廊で受賞作品および入選作品の展覧会が開催されました。受賞作品『彩の記憶』について大槻さんは「子供の頃両親に連れて行ってもらった三浦半島の海と空の記憶。その光と匂い、鮮やかな色彩をその時に見た朝顔の花に、1日も早くあの様な刻に戻って欲しいと願いを込めて制作いたしました。早く普通の生活が送れるようになる事を祈りつつ、制作に励む毎日を送りたいと思います」と話しました。

『彩の記憶』大槻洋介

第26回「学生CGコンテスト」で修了生が最優秀賞を受賞

第26回「学生CGコンテスト」アート部門で、メディア芸術副手（20年大学院情報デザイン修了）のヒラヤマナツホさんが最優秀賞を受賞しました。同じくアート部門の優秀賞を18年統合デザイン卒業・遠藤紘也さんが、エンターテインメント部門の優秀賞をグラフィックデザイン副手（20年大学院グラフィックデザイン修了）の金子勲矩さんが受賞したほか、多数の学生・卒業生が入選しています。ヒラヤマさんの作品『隣り合う人の顔も知らぬまま』は、自身の故郷でもある多摩ニュータウンを舞台に、製作したゴルフマシンでボールを打ちつつさまざまな場所を巡り歩くことで、歪な共生関係を淡々と描く試みです。ヒラヤマさんは「今回の受賞をひとつの節目ととらえ、今後の制作の糧としていきたい」と話しました。

『隣り合う人の顔も知らぬまま』ヒラヤマナツホ

卒業生が「JAGDA新人賞」を受賞

06年グラフィックデザイン卒業・窪田新さんが、2021年度「JAGDA新人賞」を受賞しました。同賞は、公益社団法人日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）が発刊する年鑑『Graphic Design in Japan 2021』出品者の中から、今後の活躍が期待される有望なグラフィックデザイナーに与えられるものです。39回目となる今回は、新人賞対象者139名の中から、厳正な選考の結果3名が選ばれました。5月には、窪田さんをはじめ新人賞受賞者の作品および近作を展示する「JAGDA新人賞展2021 加瀬透・川尻竜一・窪田新」が、東京・銀座のクリエイションギャラリー G8で開催されました。

日本酒ブランドのポスター『松岡醸造 初生』窪田新
（cl：日本酒にしようプロジェクト）

月刊『ブレーン』主催の動画コンテストで卒業生がグランプリを受賞

月刊『ブレーン』主催のオンライン動画コンテスト「BOVA（Brain Online Video Award）」一般公募部門で、18年メディア芸術卒業・西村征暁さんがグランプリを、同じく18年メディア芸術卒業・石川結貴さんが審査員特別賞を受賞しました。また、統合デザイン4年・吉田健吾さんと髙下幹人さんが学生部門賞を受賞しました。グランプリを受賞した西村さんは「『思い込みでもいいからワクワクする自分の気持ちに正直に、信じて突き進んでほしい』と思いを込めて監督させていただきました。この映像を見た学生が『広告っておもろそう！』と感じるきっかけになれたら最高です」と話しました。

『面接』西村征暁（TOKYO/太陽企画）

「文化庁メディア芸術祭」で卒業生が新人賞を受賞

第24回「文化庁メディア芸術祭」エンターテインメント部門で、19年メディア芸術卒業・油原和記さんのVRアニメーション『Canaria』が新人賞を受賞しました。本祭典は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。今年9月、東京・お台場の日本科学未来館を中心とした各会場で、受賞作品の展示・上映や関連イベントを実施する受賞作品展の開催が予定されています。

『Canaria』油原和記

伊東豊雄客員教授が「旭日重光章」を受章

環境デザイン・伊東豊雄客員教授が、2021年春の叙勲で「旭日重光章」を受章しました。2018年の文化功労者に続いての栄誉であり、芸術文化分野における顕著な功績が高く評価されました。伊東先生は2013年に「建築界のノーベル賞」ともいわれる「プリツカー建築賞」を受賞した日本を代表する建築家の一人で、本学八王子キャンパス図書館も先生の設計によるものです。

青木野枝元客員教授が「芸術選奨」文部科学大臣賞を受賞

3月3日、彫刻・青木野枝元客員教授が、2020年度・第71回「芸術選奨」の美術部門で文部科学大臣賞を受賞しました。2019年12月から2020年3月にかけて東京・府中市美術館で開催された「青木野枝 霧と鉄と山と」展の成果などが評価されたものです。「芸術選奨」は1950年から続く文化庁主催の顕彰制度で、芸術の各分野において優れた業績を上げた方に贈ることによって芸術活動の奨励と振興に資することを目的としています。
※青木先生は3月末で本学を退職されました。

『霧と鉄と山と』青木野枝 2019年 府中市美術館展示風景
撮影：山本糾　©Noe Aoki　Courtesy of ANOMALY

「LEXUS DESIGN AWARD2021」ファイナリストに大学院生チームと卒業生の２組が選出

「LEXUS DESIGN AWARD2021」のファイナリストに、大学院統合デザイン１年のカク・シンガイさん、セイ・ホカさん、チョウ・ウさん、ロ・イチライさんら４名のグループと、13年プロダクトデザイン卒業・阿部憲嗣さんが選出されました。本アワードは、革新的なアイデアで豊かな社会やよりよい未来を創造する新進気鋭のクリエイターを発掘・支援することを目的としています。本年は66カ国2,079点のエントリーの中からファイナリスト６組が選出。うち２組を本学の在学生、卒業生が占める快挙です。ファイナリストは、LEXUSの公式HP・SNSなどのメディアを通じて世界的なプロモーションの支援が受けられます。

『Terracotta Valley Wind　Intsui Design』
Chenkai Guo, Baohua Sheng, Yilei Lyu, Yu Zhang

『CY-BO』阿部憲嗣

「第10回ものづくり文化展」で卒業生が最優秀賞を受賞

「第10回ものづくり文化展」で、02年油画卒業・小山篤さんが最優秀賞を受賞しました。本展は、優れたつくり手を顕彰し、ものづくり文化の発展に寄与することを目的に開催されており、プロダクトや工芸、キネティックアートなど、さまざまなジャンルの応募作品27点の中から、「油彩・数学・機械」を統合した小山さんの作品『Parity Violation 2』が「技術や実用性を超えて人の心を動かす」との高い評価を受け、最優秀賞に選ばれました。

『Parity Violation 2』小山篤

第23回グラフィック「1_WALL」展で卒業生がファイナリストに選出

若手アーティストを発掘するコンペティションギャラリー「ガーディアン・ガーデン」の第23回グラフィック「1_WALL」展において、統合デザイン助手（17年テキスタイルデザイン卒業）の石川晶子さんがファイナリストに選出されました。また、審査員奨励賞には、メディア芸術助手（18年大学院デザイン修了）の岳明さんが選ばれました。本展は、ポートフォリオ審査による一次審査と、一対一で審査員とオンラインで対話をする二次審査を通過したファイナリスト５名が、一人一壁面を使って作品を発表するグループ展です。石川さんは布に刺繍やプリントをすることで花器や器を描き、新たな “陶芸” を行いました。

第23回グラフィック「1_WALL」展　石川さんの作品

「東京アニメアワードフェスティバル2021」で金子勲矩副手の作品が学生賞を受賞

「東京アニメアワードフェスティバル（TAAF）2021」で、グラフィックデザイン副手（20年大学院グラフィックデザイン修了）・金子勲矩さんの修了制作『The Balloon Catcher』が、学生賞を受賞しました。本年度より新設された賞で、コンペティション部門の短編アニメーションに応募された作品の中から日本国内の教育機関で学ぶ学生の作品を対象としています。金子さんの『The Balloon Catcher』が栄えある初代受賞作品に選ばれ、3月12日〜15日に東京・池袋で開催された「東京アニメアワードフェスティバル 2021」で上映されました。

『The Balloon Catcher』金子勲矩

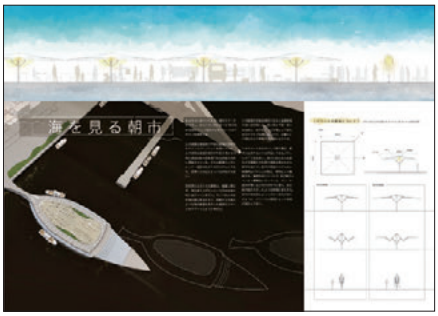
「sanwacompany Art Award」で彫刻の学生がファイナリストに選出

「sanwacompany Art Award/ Art in The House 2021」で、彫刻３年・福田ひろあきさんがファイナリストに選出されました。本アワードは、現代美術の世界で活躍する気鋭のアーティストをサポートするとともに、「アートのある暮らし」を提案する作品と展示プランを選出するものです。選出作品『あそびの場所』は、≪役立たずの機械≫≪plants≫≪t-A≫≪t-B≫の４作品からなるインスタレーションです。コロナ禍に陥った2020年の春、公共空間へ出ることへの規制や自粛の影響で、子どもたちが公園の遊具で遊ぶことができない状況からインスピレーションを得て制作されました。福田さんをはじめ今回受賞した５名の作品を展示する受賞展が、3DVR技術を用いたオンラインで開催されています。

『Useless Machine』≪役立たずの機械≫福田ひろあき
WHD 85,50,30 (cm) Marble, Cast Iron, 45C (Iron), Circulator, Black Liquid,Mixed Media October 2020

第18回主張する「みせ」学生デザインコンペで環境デザインの学生が優秀賞を受賞

第18回主張する「みせ」学生デザインコンペで、21年環境デザイン卒業・蛯名桃子さんが優秀賞を受賞、同３年の花島理咲さんが入賞しました。公益社団法人商業施設技術団体連合会（JTOCS）主催の本コンペは、街づくりや店づくり等を含んだ商業施設づくりに対する意識啓発を図り、発想力や表現力を含んだ技術の向上に寄与することを目的に開催されています。蛯名さんは各地の港に持ち運べる船型の公共スペースのデザイン「海を見る朝市」を、花島さんは花びらのようなファブリックの屋根の下に移動商業や人が集う「街に花咲き商う未来」を提案しました。



『海を見る朝市』蛯名桃子（4年時の作品）

『街に花咲き商う未来』花島理咲（2年時の作品）

人事異動

定年退職

2021年3月31日付で6名の方が定年退職されました。
長い間お世話になりました。

平出隆 教授 芸術学科

40歳で着任し、70歳で退職しました。その間、美術と言語をめぐって、芸術学科の学生たちや先生方、研究所や図書館と共に、夢のようなさまざまな実験をしてきました。最後にギャラリーでの展覧会形式に講義を集成できたのは、多摩美という場のおかげでした。鑓水と上野毛の多くの方々に、そして最初の最初にお声掛けくださった李禹煥先生に、心より感謝申し上げます。

佐原龍誌 教授 共通教育

非常勤時代を含め、本学に40年間勤務させて頂きました。体育・スポーツを担当する中で、もう一つ伝えてきたことは「無関係をどう関係付けられるのか?!」ということでした。それが、創造性と独創性の源であると思ったからです。その支えは、気力・体力・学力です。幅広さも必要なのです。このことを言い続けた40年間でした。ありがとうございました。

松田直成 教授 共通教育

昭和58年に着任、以来今年の3月まで、共通教育センターの専任教員として、ドイツ語と哲学を担当してきました。この間、諸先生方からはいろいろと御教示を賜り、また、学生諸君ともさまざまな形で交流を持つことができ、私にとってはとても充実した38年間でした。今後は、これまでの多摩美での経験を糧に、自由気ままに悔いのない余生を送りたいと思っています。

丸山浩司 教授 共通教育

油画専攻を1977年に卒業し、東京藝大の大学院に進学しました。その後は助手を経て、福島大学に12年、愛知県立芸術大学に7年、そして母校に戻って19年、トータル38年の教員生活を送りました。当大学では専門の版画ではなく、美術教育担当でしたが、充実した教員生活を送ることができました。なかでも、共通教育の責任者として、教養教育の改革に取り組み、「教養総合講座」を立ち上げることができたことは無類の喜びです。

田中誠二 参事 学生部

入職から41年になりました。これまで諸先輩や先生方に支えていただき、両キャンパスで多くの部署に携われたことは大変幸せでした。特に造形表現学部での日々を振り返ると胸が熱くなります。これからは皆様から頂きました沢山の教えを大切に、心新たに充実した人生を歩みたいと思います。陰ながら多摩美を応援しています。ありがとうございました。

勅使川原三郎 教授 演劇舞踊デザイン学科

※定年退職後、2021年4月より同学科にて客員教授として引き続き在籍されています。

退職

● 美術学部

三鑰彩音(日本画助手)
塙龍太(油画助手)
岡田育美(版画助手)
長田奈緒(版画助手)
淵脇真理子(版画助手)
野崎優里(版画助手)
大野将章(彫刻副手)
森川裕也(工芸助手)
中山典大(工芸助手)
藤井真夢(プロダクトデザイン副手)
鬼原美希(テキスタイルデザイン助手)
中野経子(テキスタイルデザイン助手)
柳下恵(テキスタイルデザイン助手)
佐俣和木(メディア芸術副手)
細道航(芸術学助手)
空閑美帆(芸術学助手)
寺岡瞳(演劇舞踊デザイン助手)
山本璃空(演劇舞踊デザイン助手)
黒木彩衣(共通教育助手)

● 附属アートアーカイヴセンター事務室

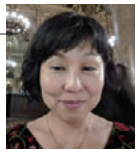
原衣代果 常勤嘱託
(以上2021年3月31日付)

● 教務部研究支援課

鈴木裕章 総合職 主事補
(2021年4月30日付)

新規採用

● 大学院



光田由里 教授

● 美術学部

千葉正也 講師
油画専攻

原美湖 講師
共通教育

川村紗耶佳(版画助手)
古川ゆめの(版画助手)
水谷珠美(彫刻助手)
ジャン・ビンナ(工芸助手)
山内奏(工芸助手)
田澤苑実(日本画副手)
渡邉洵(油画副手)
勝木有香(版画副手)
辻えりか(版画副手)
川尻優(グラフィックデザイン副手)
小野木貴康(プロダクトデザイン副手)
齊藤梨紗(プロダクトデザイン副手)
河﨑日菜子(テキスタイルデザイン副手)
佐藤有花子(テキスタイルデザイン副手)
大川原紗岐(テキスタイルデザイン副手)
三木悠尚(情報デザイン副手)
鍵谷怜(芸術学副手)
韮澤実月(芸術学副手)
青木哲(演劇舞踊デザイン副手)
中村勇輝(演劇舞踊デザイン副手)
鈴木沙知子(共通教育副手)
アディリジャン・ヌリマイマイティ
(演劇舞踊デザイン常勤嘱託)

● 教務部入試課

池内在子
総合職 書記

● 教務部 国際交流センター

牧祥子
総合職 書記

● 学生部学生課

辻雅代
専門職

● 学生部 キャリアセンター

藤田眸見
総合職 書記

● 総合企画部広報課

横井絵里子 常勤嘱託
（以上2021年4月1日付）
尾花亜希 常勤嘱託
（2021年5月1日付）

● 附属美術館事務室

髙久菜穂子 常勤嘱託
（2021年4月1日付）

● キャンパス設計室

平松みづき 常勤嘱託
（2021年5月21日付）

昇格

辛島綾 准教授（テキスタイルデザイン）
湯澤幸子 教授（環境デザイン）
長崎綱雄 教授（統合デザイン）
菅俊一 准教授（統合デザイン）
中村寛 教授（共通教育）
（以上2021年4月1日付）

研究科長

松浦弘明

学長補佐

安次富隆、佐竹邦子

教務部長

和田達也

学生部長

古谷博子

附属図書館長

安藤礼二
（任期は前任者の残任期間）

学科長

大島成己（版画）
（任期は前任者の残任期間）

附置芸術人類学研究所

金沢百枝（所員）
佐藤直樹（所員）
椹木野衣（所員）
（ただし、1年任期とする）

名誉教授

佐原龍誌、平出隆
松田直成、丸山浩司
（以上2021年4月1日付）

客員教授

● 美術学部

- 日本画：**町田久美**
- 油画：**塩田純一、O JUN、藏屋美香**
- 版画：**倉地比沙支、秋山伸、清水穣**
- 彫刻：**北澤憲昭、多和圭三、福永治、須田悦弘**
- 工芸：**武田厚、安藤泉、天野裕夫、藤田政利、八田雅博、関井一夫**
- グラフィックデザイン：**葛西薫、三浦武彦、津山克則、竹中直人、菊竹雪、カリ・ピッポ、佐藤可士和、加藤久仁生**
- プロダクトデザイン：**ヴァーリヘイ・ユディト、アウグスト・グリッロ、小倉ひろみ、山中俊治、廣田尚子、岩佐十良**
- テキスタイルデザイン：**新垣幸子、関島寿子、皆川魔鬼子、ヘレナ・ハイヴァネン、伊藤志信、皆川明、相澤陽介、安東陽子、池田祐子、鈴木マサル**
- 環境デザイン：**伊東豊雄、藤江和子、中村好文、廣村正彰、青木淳、団塚栄喜、田根剛**
- メディア芸術：**伊藤俊治、四方幸子、坂根厳夫**
- 情報デザイン：**小林章、上田壮一、暦本純一、西山浩平**
- 芸術学：**酒井忠康、菊地信義、田窪恭治、高萩宏**
- 統合デザイン：**佐々木正人**
- 演劇舞踊デザイン：**勅使川原三郎、國吉和子、高萩宏**

● 大学院

馬越陽子、横尾忠則、沓名美和
（以上2021年4月1日付）

追悼

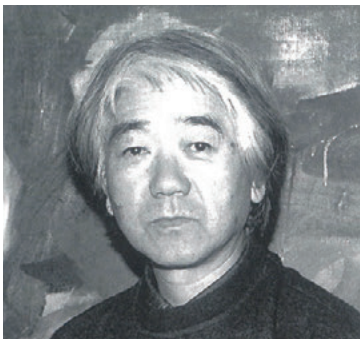
咽原省三 名誉教授

1977年～ 教授（デザイン科グラフィック）
2003年～ 名誉教授
2021年1月28日 逝去　96歳

咽原省三先生を偲ぶ

グラフィックデザイン学科教授 **野村辰寿**

ご自身の咽を指差し「ノド」、お腹を触って「ハラ…咽原です」と、ユーモラスに自己紹介されていた咽原省三先生。僕にとって印象深いのは咽原先生ご担当の3年次の選択科目「ICD」です。「ICD」って何？と思われるでしょうが「インターナショナル・コミュニケーション・デザイン」の略、なんと大仰な授業名でしょうか。しかしその内容が実にユニークで、毎週「目」「東京」「テレビ」などといった様々なテーマが与えられ、翌週以降にそれらについて何らかの作品を発表するというもの。そしてその表現形態は制約なしのまったく自由。ポスターやイラストはもちろんのこと、写真や立体からコントなどのパフォーマンスまで何でもありのプレゼン道場のような授業でした。そこで僕は与えられたテーマのひとつである「一円玉」から着想を得て、はじめてのアニメーション作品『1・1/2円玉事件』を8mmフィルムで制作し、映写機を持参し授業で上映しました。まだアニメーションの授業など微塵もない時代ですから、物珍しさからか、先生をはじめクラスメートが拍手喝采してくれました。人を楽しませる喜びを実感できたことが、その後も映像やアニメーションの道に進むきっかけとなりました。教える立場となり、多摩美における「学びの自由」は、こういうところにもあったのだなと、ふと思う今日この頃です。咽原先生、ありがとうございました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。



鶴見雅夫 名誉教授

1984年～ 教授（絵画科油画専攻）
1998年～ 学科長
2006年～ 名誉教授
2021年1月31日 逝去　85歳

鶴見雅夫先生を偲ぶ

油画教授・学科長 **木嶋正吾**

名誉教授の鶴見雅夫先生が今年1月にご逝去されました。人一倍、多摩美を愛し大学に尽くし貢献されたお姿が偲ばれます。
私が専任講師に着任し、いきなり教務主任を任された時、鶴見先生に「責任は私が取るから、思う存分やりなさい」と励ましていただいたことが忘れられません。また、授業評価アンケートのない時代に、油画では事あるごとにアンケートを取っていましたが、学生の意見を取り入れた改革は鶴見先生の発案でした。優しく頼りになる先生でした。
長い間、大学の理事や評議員、学科長を務められ、退職された後も校友会の理事長としてご尽力されました。いつも大学全体のことを考え皆の話をよく聞かれ、教師としてだけにとどまらず大切なことをたくさん教えていただきました。
長年にわたるご指導に感謝するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

謹んでお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

多摩美術大学美術館

多摩市落合1-33-1｜10:00～17:00｜火曜休館｜一般=300円 ／ 20名以上の団体=200円
（障がい者および付添者、学生以下は無料、卒業生も校友会カードの提示により無料）

【前編】起源
7月10日[土]～9月20日[月・祝]

【後編】継承
10月2日[土]～11月21日[日]

寺田小太郎 いのちの記録 ーコレクションよ、永遠に

2019年本学では、東京オペラシティ街区地権者の一人である故・寺田小太郎氏（1927-2018）から59点の作品を受贈いたしました。これを記念し展覧会を開催いたします。総数4,500点に上る「寺田コレクション」は、難波田龍起・史男親子の国内屈指となる作品群のほか、戦後日本美術から現代アートに至るまで幅広い年代・ジャンルにわたります。本展では前編・後編を通じ、当館収蔵品を含む約190点の作品と資料から、寺田の想いに寄り添いその人物像を浮かび上がらせるとともに、コレクションに込められたメッセージを紐解きます。また寺田が長年携わった「造園」の仕事にも光を当て、そこで育まれた自然観・美的感性と収集活動の相関を探ります。

アキバタマビ21

タマビが運営する新しい創造の場　3331 Arts Chiyoda内にあるアキバタマビ21は、若いアーティストたちが展覧会を行うスペースです。卒業後のキャリア形成支援を目的としており、企画から広報物・アーカイブ作成まで自ら手掛ける企画展を、年間約8回開催しています。
千代田区外神田6-11-14 3331 Arts Chiyoda 201・202｜12:00～19:00（金・土は20:00まで）｜火曜休場｜入場無料

7月31日[土]～8月20日[金]
第90回展「妄想公園」

現実を理想に近づける原動力ともなる「妄想」の世界を分かち合う展覧会。会場を公園に見立て、作家の妄想を遊具にした空間でARキャラクターと一緒に遊ぶこともできます。
出品作家＝井上樹里、小林真理江、道源綾香、宮内理

8月29日[日]～10月3日[日]
第91回展
「Ordinary than Paradise 何事もなかったかのように」

日常が根本的に揺らぐことになった今、それでも平凡な日常（ordinary）の集積による表現を模索する5名の作家による展覧会。
出品作家＝北村早紀、石原絵梨、赤羽佑樹、吉國元、中野由紀子

アートテーク

八王子キャンパスの中心に位置する、知と創造の多面的複合施設　アートテーク（Art-Theque）は2015年、旧図書館跡地に建設された施設です。ギャラリー、自由デッサン室（石膏室）、大学院博士後期課程アトリエ、アートアーカイヴセンター、収蔵庫などで構成されています。
八王子キャンパス内｜ギャラリー開場時間 10:00～17:00（展覧会による）｜日曜・授業日以外の祝日休館｜入場無料
以下は、ギャラリーで開催予定の展覧会です。
日程および展覧会名は予定の情報です。最新情報はHPでご確認ください。

9月8日[水]～25日[土]
多摩美術大学助手展'21

10月4日[月]～19日[火]
家村ゼミ展2021

10月2日[土]～14日[木]
版画五美大ポートフォリオ版画展

展覧会・公演

4月10日[土]～8月29日[日]　弘前れんが倉庫美術館
油画｜雨宮庸介 非常勤講師、ほか卒業生
りんご宇宙ーApple Cycle / Cosmic Seed

6月5日[土]～8月7日[土]　Blum & Poe Tokyo
油画｜中村一美 教授
Kazumi Nakamura 個展

7月2日[金]～11月28日[日]　21_21 DESIGN SIGHT
統合デザイン｜菅俊一 准教授（ディレクター）
21_21 DESIGN SIGHT企画展「ルール？展」

7月13日[火]～9月5日[日]　目黒区美術館
グラフィックデザイン｜佐賀一郎 准教授（企画協力）、
03年グラフィックデザイン卒業・大西隆介（グラフィックデザイン）
包むー日本の伝統パッケージ

7月17日[土]～9月5日[日]　茅ヶ崎市美術館
テキスタイルデザイン｜藤原大 教授
human nature Dai Fujiwara
人の中にしかない自然 藤原大

9月10日[金]～12日[日] 4ステージ　東京芸術劇場シアターイースト
演劇舞踊デザイン｜柴幸男 講師（原作）、19年演劇舞踊卒業・西岳（脚色・演出）
文化庁委託事業 令和3年度 次代の文化を創造する新進芸術家育成事業
演劇系大学共同制作公演「あたらしい憲法のはなし3」

新刊

七十人訳ギリシア語聖書『マカベア書』
秦剛平 訳（名誉教授）
青土社｜2020年12月24日刊｜
6,380円（税込）

平成美術
—うたかたと瓦礫（デブリ）
1989—2019
椹木野衣、他 編（共通教育｜教授）
世界思想社｜2月28日刊｜
3,500円（税込）

これからのデザイン経営
—常識や経験が通用しない時代に顧客に必要とされる企業が実践している経営戦略—
永井一史 著（統合デザイン｜教授）
クロスメディア・パブリッシング｜
3月1日刊｜1,848円（税込）

本学の新型コロナウイルス感染症対策に準じて、開場時間や内容が変更となることがございます。HPで事前に確認してからご来場ください。

「TAMABI NEWS」では受賞や活動報告を募集しています。総合企画部（TEL：03-3702-1168 ／ e-mail：news@tamabi.ac.jp）までお知らせください。

Tama Art University
多摩美術大学 広報誌「TAMABI NEWS」2021年7月16日発行 第30巻 第1号 通巻87号
発行：多摩美術大学 東京都世田谷区上野毛3-15-34 電話：03-3702-1141（代表） 編集：総合企画部